

## 日本についての感想文

クラウディア・ショラ

(西ドイツ)

日本からドイツへ帰って来たのは、ちょうど8か月前のことです。信じられないぐらい時間がたちます。

ドイツに着いたばかりのころは大変でした。「日本に戻りたい」と毎日思いました。しかし、だんだん仕事が増え、ここの日常生活に慣れてきたので、日本への憧れがしだいに薄らぎました。

それにもかかわらず、しばらくたってから、不意に日本滞在中におこなわれた個々の事をはっきり思い浮かべることがしばしばありました。

今もそうです。

これまで日本学科のなかに専門分野がない私は、日本の留学中にとっても印象に残ったことについて書かせていただきたいと思います。

ドイツの大学での外国語の授業では、だいたいいつもドイツ語で教えられています。外国語での会話、または聞く練習は、あまりありません。ですから、日本にきて、最初の4～5か月ぐらいに、私が言いたいことを言えなかったことがよくありました。

1988年の11月に、お茶の水女子大学の隣にある中学校に、私達留学生が招待されたときにも、ちょうどその状態でした。その中学生は私達の一人づつに自分の国について質問しました。私はとても緊張しましたが、非常に面白い出会いだと思いました。

しかし、「ドイツにはナチズムはまだ強いですか。」というような質問を聞いて、口がきけないぐらい驚きました。ちゃんと説明したかったけれども、その時の私の日本語能力は、残念ながら、まだ足りませんでした。あの中学生達が今でも同じようなドイツのイメージを持っているのかどうか、ちょっと心配なんです。

そのあとにもそれに似ていた経験をしました。日本人にドイツについて聞くと「ビール」以外に一番よく出てくることばは「ナチ」と「ヒトラー」だそうです。どうしてでしょうか。50年も前のことなのに。

私が通ったドイツの高校では、一年生の時、大体一年間に歴史の授業で第

一次世界大戦と、おもに第二次世界大戦のことを勉強しなければなりません。戦争についての映画、テープやビデオを見たり聞いたり、先生と一緒にダッハウの強制収容所へ行ったり、国語の授業で「アンネの日記」などの本を読んだりしました。第二次世界大戦の際、ドイツ人の一部がどんなに悪いことをしたか分かるようになるわけです。

その一方、日本の学生に聞くと、彼らは戦争中のドイツ人の戦争犯罪をよく知っているようですが、そのとき、日本軍も悪いことをしたのはあまり分からないそうです。日本の高校の授業計画にははいていないのかもしれない。

ある日、新宿の大きな本屋でドイツについての本を捜しに行きました。そこで、一つの本だにドイツに関する本は35冊ありました。10冊はドイツ文化の本や旅行のガイドブックでした。ほかの3分の2はヒトラー、ナチとユダヤ人迫害についての本でした。ドイツの本屋では、日本旅行のガイドブックの隣に日本の文化か経済についての本が並んでいますが、戦争犯罪に関する本はありません。

戦争の話はあまり良い話しではないと思いますが、私は日本ではそれと何度も対決させられて、困っていました。

去年の夏に、九州の団体旅行に参加しました。ある退職した中学校の先生もいっしょでした。その先生は戦争中に小学生として学んだドイツの子供の歌、そしてあときのナチのドイツが日本では範として取られ、感嘆されたことをまだよく覚えられました。「現在のドイツはどうか。ドイツ人はまだそんなに働き者ですか」と私に聞きました。「いいえ、それは今と違います」と私が答えて説明しましたけれども、今でもときどきその中学校の先生との話し合いを思い出します。日本とドイツの労働条件に興味を持っているのです。

日本のテレビや新聞に時々出ている統計によると、ドイツ人の週平均労働時間は少なく、日本と比べたら、休暇は非常に長いそうです。戦争のすぐあとまではドイツ人が働き者であるとの評判は正しかったですが、今のころにはやっぱりかわったような気がします。現在ドイツでは、職場が安全である限り、自分の義務より自分の権利に固執するようです。大体毎年、たとえば、産業労働組合と経営者団体連合との間に長期的な賃上げ団体交渉があります。従業員は昨年より就業時間短縮と同時に賃上げを要求します。矛盾で

はないでしょうか。

中小企業の場合には、賃上げ団体交渉はめったにありませんけれども、従業員の仕事に対する態度は同じらしいです。ここでは、日本人とドイツ人の一般的の職業観は異なっていると思います。

もちろん、違う生活条件もそれに影響を与えています。日本の会社は時々大きい家族のようだとされています。失業に対する保護や健康保険などの社会給付は会社からもらえます。その一方、社会福祉国家と呼ばれている西ドイツでは、社会保険は、職場をかわっても、かなり安全なことです。時には失業手当が、新しく提供された職場の給与より高いから、その場合に失業手当を優先させる人が少なくないとは言えません。主にサービス業はそんな状態だという気がします。

両親の店にも、右に述べたような従業員の仕事についての意識をよく経験できます。

今の若い日本人は違うかもしれませんが、一般に日本人が会社の集団志向のために残業をしたり、休日出勤したり、同僚に迷惑をかけないように長期休暇をとらないで、あるいは交代で休暇をとったりするということです。ドイツでは、ある小さい会社で、殆どすべての社員が同時に休暇をとったので、会社がその間に営業を中止しなければならなかったこともあります。雇い主の権利は雇い人の権利より弱いらしいです。

ですから、ドイツに就職する人は少しでも日本人の職業観があればいいなあと時々思います。

それでもやはり大変に片寄っている考えでしょう。実は、会社のためにあくせく働く人の職業観にも欠点があります。一週間に5、6日間、一生懸命に働いているご主人は日曜日だけを家族と一緒に過ごすことができると、それは家族生活に害します。他方では、ご主人が何年も仕事のためにめったにお宅にいないことに慣れてしまった奥さんには、ご主人が退職して一日中お宅にいと、どんなに大変な変化でしょう。

同僚と調和を保つためにあまり休暇をとらなく、あくせく働くことがいいですけれども、自分自身と家族の欲求を疎かにしないほうが良いではないでしょうか。

ある金曜日の夜、大手銀行に勤めている知人と一緒に六本木のディスコテークへ遊びに行きました。そこで、まず目についたのは、女性は殆どいなく

て、大体男性ばかりだったということでした。知人に理由を聞いたら、「平日には男の社員は普通午後8時すぎまで、女の社員は午後5時まで働くので、男性だけのグループが夜どこかへ遊びに行くことも少なくないんだ。」と説明されました。都心から口蓋の住宅までの帰り道も遠いし、最終の電車やバスに間に合わないといけないこともあるので、夜遅くまで遊びまわるのは無理だそうです。同じように、東京には、コンサート、映画や演劇などの開演は午後6時か7時になっているそうです。

私が今住んでいる町では、それぞれ、開演が午後8時か8時半からが普通です。ディスコテークの方はもっと遅くて、夜10時過ぎないとにぎやかになりません。一般の交通機関に依存しないで、自分の自動車を運転する者達が多いことも一つの理由でしょう。

東京の高速道路は渋滞が非常に多いことで有名です。ですから、車より便利な電車を通勤や通学などのために利用する人はたくさんいます。しかし、平日の毎朝毎晩、一時間以上に、すし詰め of 電車で職場へ行ったり、又は休日にもこんでいる行楽地へ行く電車が満員だということを日本人自身でもいやがっていて、なじめません。

再び、銀行に勤めている知人の例ですが、彼は平日の朝5時に起き、横浜から新宿にある銀行まで通って、夜の10時ごろまで働きます。夜中にまた横浜の自宅に着きます。週末は休みですが、平日の寝不足が残っているので、土曜日は昼近くまで寝たり、一日中家でぶらぶらして、日曜日だけ趣味を楽しんだり、どこかに遊びに出かけたりします。

シュタルンベルクの銀行に勤めている友達に横浜の知人の銀行員の一日の経過について話しましたが、友達は信じられない顔をしました。

中小企業、あるいは、小さいお店で働く日本人の仕事日はそれよりもっとほねがおれるそうです。東京の肉屋で店員として働いた友達は、たとえば、朝6時半ごろの最初のバスで職場へ出勤し、夜の最終のバスで帰ってきました。その上、お休みは日曜日だけでした。しかし、これは例外ではないらしいです。

どうして日本人がそんなによく働くのだろうかと自問自答することもよくあります。

海外で「work-holics」(仕事中毒)としばしば呼ばれる日本人はあくせく働いているので、お金もたくさん儲けるだろうといううわさもあります。

日本を遠くからしか見ない人は、日本の大きい企業が外国の会社や土地や有名な絵画をどんどん買い漁ったり、ヨーロッパか米国に行く日本の観光客がお金を無駄に使ったりすることを理由にあげて、「やっぱり日本人はお金持ちですね。」とねたましく思うようです。

しかし、日本で生活して、日本人の本当の生活状態を直接に見ると、意見、あるいはそれまでの偏見が変わってくると思います。つまり、ドイツほど日本の社会福祉制度はととのっていないなくて、子供の授業料、医療費などの費用や養老手当のためにお金をたくさん貯金しなければならないことや、ほかの国より家計がより多くかかることは知られていないようです。

出世するためには日本社会に順応することが必要だそうです。評判も給料もいい会社に入社するための競争は幼稚園からはじまります。その一方、有名な大学から一流の会社に入ることができたら、将来はあまり不安がないそうです。

会社に尽くすために、社員は会社に対して誠実でなければなりません。すなわち無償の残業をしたり、いろいろな職責範囲に順応したり、家族を残して海外へ出張したりすることはまだまだ当然なことです。

日本の大手商社に勤めている日本人の友達は一年間半、ドイツに行かせられて、ここで勉強しました。ドイツの労働条件に感心して、「僕もそういうふうになりたい。日本に帰ってから、あまり残業しないで、権利がある休日をちゃんと取るよ。」と言いました。私がこの友達に日本で再び会ったときに「やっぱり、残業しないとだめそう。」と言いました。

個人主義者などは日本社会には好ましくなく、生活が苦しいそうです。ですから、あくせく働くような気がします。

海外に留学して、他の国をよくインフォームした若い日本人の間には、だんだん前の世代と違う職業観が生まれてくるでしょう。

日本は裕福な国と呼ばれているのに、国内では入学試験制度、住宅難、身分の差、高い生活費などの問題があります。どこの国にもそれぞれ重要な課題があると思いますが、世界第一の工業国になった日本は、これから生産高をあげるだけではなくて、もっと国民の生活改善に努力すればいいのではないのでしょうか。